

どう展開、加工メーカー



自動車向けばね用鋼線の大手二次加工メーカーである鈴木金属工業は、輸入に依存していたピアノ線を初めて国産化したパイオニア企業だ。

自動車用のほか、家電・精密機器、建設、医療分野向けの高品質ワイヤを約1万種類にわたって手掛ける。

同社の強みは自動車エンジン用弁ばねなどに使われるオイルテンパー線（OT線）。OT線分野での世界シェアは50%近くに上り、無論第1位だ。

品質の決め手となるのが、ばねの強度やコイルリング性（成形性）といった要素。柴田真之社長は「これらのパフォーマンスは鈴木金属の技術だけで実現して

いるのではない」と説明する。

今年6月、社長に就任した柴田氏は新日鉄住金常務執行役員時代に棒線事業の課題を洗い出し、新日鉄住金と二次加工メーカーの一体化を図る「ステイリーリンク」の発案に携わった企画リーダー的存在だ。

柴田社長は鋼材、とりわけ製鋼技術と二次加工の組み合わせの重要性を強調する。「新日鉄住金によって介入物を極限までコントロールした線材と、鈴木金属の伸線・熱処理技術が二つ合わさって初めてお客様に選ばれている」。

OT線のサブライチエーションは①線材メーカーである新日鉄住金②二次加工の鈴木金属③部品（ばね）

メーカー④自動車メーカー、という構造。ステイリーリンクで①と②が一体となり、③、④の顧客との連携だ。

メーカー（Link）により最終部品のスタートは連続製造工程。どのチャージで造られた、どのピレットで不良が出たのかを特定できなければお

合せて複眼的に捉えられようになった。また、従来は日本からワイヤを輸出していた海外の日系自動車向け明細については、SG現地拠点からの供給に切り替えることによりユーザーの現調化への対応も進める。グループの14年度連結売上高は05年度に比べて約2倍となる見通し。そのうち半分を海外が占める。

（和田 政憲）

② ばね用・PC鋼線 鈴木金属工業



今週都内で開いたグローバルミーティングには世界各拠点の幹部が集まった。ガルピタン買収後、年2回開催し情報共有する（左から7人目が柴田社長）

高品質ニーズに連携で対応

グローバル供給加速

ステイリーリンクの土台は「マエストリア」という製造実力のブランド。これを支える重要な要素の一つがトレーサビリティだ。OT線のような重要保安部品に加工されるハイエンド商品は、トラブル発生時の危機対応から逃れられない厳しい世界。1チャージ250トの製鋼鍋から数万個の弁ばねが造られる自動車マーケットにおいては、仮に不良が出た場合にこのサプライチェーンを遡及できなければ、お客様の安心・安全が確保できない。「トレーサビリティの」マが、同社が09年に買収し、当時世界最大の弁ばね用ワイヤメーカーだったスウェーデンのガルピタン社（現ススキ・ガルピタン）を買収して、SGだ。買収で欧米・中の製造拠点を獲得、従来の日系顧客のみならず、欧米系ユーザーのニーズも

お客様の安心、信頼は獲得できない」。柴田社長はこのトレーサビリティの強みが、特に海外材に対する差別化につながるという。この連携は、いわば「上下の縦連携」であり、薄板の世界では当たり前になっている熱間圧延・冷延・表面処理一貫の取り組みを、線材・二次加工の世界に当てはめようとするもの。この連携は今後期待されるウルトラハイテン材の開発でも発揮されそうだ。一方、鈴木金属にとっての「横連携」の最大のテーマ。両社の持つ技術を融合し、グローバル規模で活用していくことで一層のプレ

（和田 政憲）

